上/稲を刈り取る児童
下/稲架掛けをしている様子

左/小学校田で実った収穫前の稲穂

子どもたちに収穫の喜びを

周囲の山々が緑から色鮮やかな赤や黄へと変わり、紅葉が始まる9月下旬。田んぼの稲穂がたわわに実り、こうべを垂れ黄金色に染まると、今年も稲の収穫の時期となります。

町内の小学校では授業の一環で、稲の刈り取り、※稲架掛け(はさがけ)、脱穀まで一連の作業を行います。

児童たちは自ら鎌を持ち、稲を刈り、束ねてわらのヒモで結んで、軽トラックに次々に詰み込んでいきます。次に校庭脇のフェンスに稲架掛けをし、約1ヵ月間乾燥させてから脱穀をします。

脱穀作業は、先生が昔ながらのやり方を児童に教えつつ、地域の大人と一緒に機械を使って作業をしていきます。春に自分で植えた稲の苗が、すくすくと育ち、雨や風に耐えながらも実をつけ成長していく、命が育つ姿を近くで見守ることができるのは、都会育ちの私にとっては贅沢であり、何にも代えがたい体験であると思います。そのように生まれ育った環境によって子どもの心が育まれていくのではないでしょうか。例えば、日頃から町内の小中学生が、私たちにも自発的に挨拶をしてくれることに、田子町で育った心の優しさが表れていると感じました。

また、町内の小学校を取材して思ったことは、大人と子どもの距離が近いということです。特に校長先生が子ども一人一人の顔と名前を把握し、愛情を持って声をかけていることに田舎ならではの子育ての魅力を感じました。この町の、人の繋がりの豊かさと強さが滲み出ていて、こちらまで心が温かくなりました。

※稲架掛け　稲を刈り取った後に棒などに掛けて干し、米に残らず栄養を行き渡らせ、適度に乾燥させる、美味しく食べるための先人の知恵。

レポート
木村知子　神奈川県出身
田子町定住移住コンシェルジュ
(田子町地域おこし協力隊)

秋